特12
946

帝國圖書館藏

安心小話

禿義峯 編

無我山房藏版

明治
44.12.8
内交

はしがき

世に「まことのことば」ほど人を動かすものはありませぬ。たとひ一文不知の尼入道の申した一言半句でも、これが眞心の信念から溢れ出たものでありますれば、世の人を動かすことは學者論議者の百萬言にも勝ることゝ思ひます。況や一代の光となつて多くの人を教化されました碩德の血の垂るやうな切ない信仰告白を拜讀致すときは石のやうな私共の心も自然に動かされずには居られませぬ。

本書はこの「まことのことば」を集めて一生の心得草に致したいと思ひまして、編者が所藏の惠琳講師、惠劔講師、香樹院講師、一遥院講師、香山院講師の自督帖や、明信、大量、等覺、伏明の諸師が日乘など、すべてその手記錄中の殊に味ひ深き語を蒐錄し、其上、編者の家翁を訪ね來られし諸

方の信者から承つた話、その中には親しく香樹院講師、一蓮院講師について教を受けられた話もあれば、明信師、大量師に近づいて聴聞せられた話もあり、また篤信者の自督の談片などもありましたのを、唯なにくれとなく附け加へたものであります。但、既に公にされた諸師の語錄中にあるものは重出をさけて成るべく除くことに致しました。本書の説話中には、ときく耳なれぬ言葉や天爾波があります。けれどもこれは古德の俤を偲び、先達の風姿を懷ふよすがにもなることゝ考へまして態と修正を加へぬやうに致しました。また此種の編著に多く見受けますところの各話の見出しの如きも、編者の不用意から却つて讀者の味解を害ふやうなことがあつてはならぬと恐れまして、不便とは存じながらも殊更略した次第であります。

編者もと淺學非才、別けて德もなく見もありませぬ。たゞ日夜自己を修むるに刹那の餘暇もない身であります。まして人に加へんとする閑時日などあるべき筈はありませぬが、曩に『香樹院語錄』の蒐輯に與り、その後『家庭講話』『貫練叢誌』上に掲載せしところ、諸友より上梓を促さるゝこと屢でありますため、茲に本書を公に致し、名けて『安心小話』と號した次第であります。申すまでもなく、安心とは信心、信念、信仰の異名でありますが、若し天下に一人の覺醒者を得ますれば、たゞ編者一人の幸ばかりでないと存じます。

明治四十四年十月二十五日　　禿　義　峯　識

安心小話

禿義峯編

一　惠然講師いはく。邪見邪解の博識にならんよりは、田夫野叟になれ。法を守りて死すとも、法を賣りて活命するこなかれ。

二　香樹院講師いはく。これ一つきゝつけずば置くまい〳〵の心がゆるんだら、佛になる種を失ふたと思へ。

三

一蓮院講師いはく。もうちつと氣掛なと思ふは、まだ彌陀をたのまぬなり。落付かれぬ〳〵と云ふは、固より彌陀をたのまぬなり。落付いたと喜ぶも、彌陀をたのまぬなり。落付かれぬによりて落付かうとはりこむも、彌陀をたのまぬなり。落付いたが落付かれぬかと試して見るも、彌陀をたのまぬなり。

なぜなれば、これは我心をながめてたのまんとして居るなり。方角を取りちがへて居るなり。されば、自力はすたりさうで、すたらぬものなり。かへすがへす我心をながめず、彌陀をたのむべし。

彌陀をたのむと云ふは、本願の月に眞向になりて我心をながめぬことなり。

四

又いはく。仰せだけで安心せよ。仰せを聞いて、それを我が機へもどして安心せやうといふのは、深く彌陀を賴んだのでない。仰せだけで安心して仕舞うのが、ふかく彌陀をたのんだのぢや。

五

明信寺の仰せに。多くの人が、これまで聞きこんだことを信じてをる。爰がまことに大事の所で、聽聞といふは今日ばかり〳〵と聞くのぢや。餘事外

事を信ずるのではない。たゞ御助け下さるゝことを信ずるのちや。勅命のきゝ付けられた相は、あいと振り向く斗りちや。喩へば、落し咄のおちた如くちや。落し口のわかるとわからぬ者はおかしくない。この落し口のわかるとわからぬとは宿善に限る。

六

或人幾度もかれこれのべて、まだ肯へぬといふ。明信寺微笑しながら涙ぐみて曰く。

その樣なことではない。たゞおれをあてにして來いかならず當違ひはさせぬと仰せらるゝことちやほどに、眼を醒してきかれよ。

七

江州栗田郡下笠村に、ゆたといへる香樹院講師歸依の同行ありき。師一日、御通行のとき、侍者をしておゆたはどう日送りをしてゐるぞと尋ねさせられしかば、おゆた涙を流し、有難う御座ります。この婆々は如來さまの御慈悲に日々涎を流して日暮し致して居りますと御傳へ下されと答ふ。

講師いはく。甘いことをいふてゐるなあ。それは必ず云はせ手があろう。

八

一蓮院講師、不倒翁を買はせられて仰せに。幾度

抛げても〳〵起きあがるは、中に仕掛があるからなり。後生のことには、すりこみ〳〵する奴が、かゝるものをと起き上がるは、仕掛があることぢや。

九

皆往院講師いはく。

ながゝりし小豆角の花は短くて
みじかき栗の花のながさよ。

小豆角は長きものなれども花は短く、栗はみぢかきものなれども、花はいたりて長し。長くあるべき坊主の信心の花は短くして、在家の信心の花がかへつて長い。これが此世の歎かしき有様なり。こゝ

の處で慚愧なくしては、今死ぬるなり、たゞちに地獄なり。

一〇

香樹院講師の仰せに。眞宗の僧分は、心中を律僧のごとく慎むべし。又いはく。僧分の身は、佛法三昧法義三昧の身なりと心得べし。

一一

明信寺いはく。僧分は小さい穢いことで、大きな後生を取り仕損ずるぞ。

一二

香樹院講師いはく。在家は愚痴なれども、聞法に因縁厚し。僧分は御慈悲は厚くかふむれども、法を聞く因縁は薄し。

又いはく。浮世の榮華を自身の福分とおもひ、假の名聞をわが身の手柄とこゝろえ、日々無間の業因を造るを何とも思はぬが僧なり。

又いはく。此世は佛祖の御前へ出て、佛祖も欺き同行も欺くが、臨終の時欺かれぬは火車の迎ひなり。悲しきかな。袈裟を着用する身とまではなりたれもど未來の墮獄は近きにあり。

同師の歌に。

あざみ草わが身の針をしらずして
花とおもひしきなふけふまで。

一四

理綱院講師いはく。佛者のなかに世間に貪着して出離得脫の道に心なきは、命のをはる大事瞬息の間に來ることを知らざるが故なり。

香樹院講師いはく。『涅槃經』の盲龜浮木の御喩と、『遺教經』の無常の火の付きたる身の御喩のこゝろを忘れて暮すものは釋氏に非ず。

三州おそのゝ口すさみに、

法水で自力の化粧おとされて
もとのすがほでまゐる極樂。

あなたよりきせもらふた丸合羽
手さへ出さねばぬれるけもなし。

機をみればどこをとらへて正定聚
法にむかへばうれしはづかし。

一六

江戸に皮籠張を職とせる一蓮院講師の同行あり き。一日播州より尋ね來りし人に言傳して曰く。お前さん歸國されて、若し一蓮院樣に逢はれたら、某

は相替らず、毎日皮籠張を精出して働いて居ると申し傳へてください。日々佛法三昧で暮して居ると聞こしめさば、屹度御案じ下さるゝから。

一七

和泉の吉兵衛は藏の三つもある富豪なりしが、後生が苦になり田を賣りて金になし、それを腰につけては法を聞き歩き藏も賣り道具も賣り、後には家を賣り數十年間一日の如く訪ねまはりて聽聞せり。人々いはく、金の草鞋はいて求めるとは吉兵衛のことなりと。吉兵衛いはく、今日喰ふものさへあれば十分と。

一八

吉兵衛七十餘歳となり魚屋の賣子となり、毎日、當百の四五枚を貰ひて歸る。隣家の小兒二三本の花を折り來りて吉兵衛に參らす。吉兵衛はこれを受け、有難や、またこの重い尻を動かして下さるゝと喜びながら、件の花を佛前にさゝげ、小兒へは禮のため當百の二枚も與へたり。これを見る妻は、たゞあきるゝばかりなりしといふ。

一九

大和に狩野法眼の筆すて岩といふものあり。頗る面白き石といふ。吉兵衛見ていはく。これは法

眼が筆を捨てたるにはあらず、岩が筆を捨てさせたるなり。

仰せが佛法なり聞いた心が佛法にてはなきなり。

二〇

江州吉右衛門の老嫁の許へ近村の某女尋ね行きたりしが、嫁いはく御前樣は何處の人なりや。女いはく、某村のものなりと。嫁いはく、御前樣も御淨土へ參らしてもらう人ぢやねい。女いはく、そこが聞えぬので今日は參りました。嫁いはく、それでも御念佛を申さんすもの。

二一

ある人明信老人に、雜行すて〻一心に彌陀をたのむ斗りにて候か。

師いはく。いやさうでない。雜行すて〻彌陀をたのむのぢや。

二二

讃岐の庄松の口すざみに。

庄松そのまゝありのまゝ國は讃岐で彌陀はみぬきで。

又いはく。ほんまが出來たらそらうそぢやそこない〳〵。

二三

伊勢疊屋藤七いはく。凡夫心の兎の毛の先でついたほども間にあはぬことを、はつきり知らせていたゞくことは甚だ難いことぢや。

二四

大和に厚信の同行ありき。香樹院講師に隨ひて年久しく聽聞せし人なり。一人の僧尋ねていはく、汝は信心決定して出立の路銀の用意あるべし、何卒聞かせられよ。同行いはく、私は無一物で御座ります。僧いはく、それはいかに。同行いはく、親に連れられて行く子の手許に路銀の支度は必要なきこと

二五

源正寺いはく。其方思案するかや。我は一夜に三度づゝ胸に手を置いて思案するぞ、と。

又いはく。この次は極樂で逢はふといふ人があるが、それはちつと行過ぎと思ふ。

二六

ある人知道師へ心得顔に領解を述べたれば師大喝して曰く。

その方は五劫の御思案の相談にのつたか。永劫の御修行の御手傳した覺があるか。

二七

等覺老師いはく。百兩の品に百兩出して買ひにかゝるが聖道門(三祇大)。五兩かゝ七兩出してかゝるが自餘の淨土宗(二萬三萬念佛)。淨土眞宗の者が聞いて領解してとかゝるは、百兩の物に一厘や二厘出して買ひとる心得なれば、やはり賣買の商法になるなり。今は然らず。『謹案淨土眞宗有二種廻向一一者往相二者還相』等と丸々の御廻向なれば、百萬兩の身代を子が親より讓り受ける如く、聞くばかり貰ふばかり、御聞かせが御廻向なり、聞くのが賜るなり。

二八

一蓮院講師の御尋ねに、聞く氣のなき者を聞く場

に引き出すが救手の役で御座りますか。

香樹院講師の仰せに。　さうぢや〳〵。　それからさきは凡夫の力ではゆかぬ。

又仰せに。　我は宿善を引き出すやう〳〵に云ふて居る。

二九

香樹院師いはく。　信を得るには宿善に限る。　我等もいよ〳〵大事にならば暇つぶして聽聞もしやう骨もをろうが、若し宿善開發の機でなかつたらなんとしやうと案ずるより外はない。（香山院講師いはく。　これは此場にいたらぬ人はしらぬことなり。）

我心でわがこゝろがしられぬ者が凡夫ぢや。　まことに宿善がなかつたらなんとしやうと思ふものぢやが、朝夕佛前に跪き、念佛稱へる身にまでしてくだされたもの、宿善なきことがあらふか、どうぞこゝで一つ大悲の御胸をやすめたいと、實に思ひたちて聽聞を心にいれ候はゞ、いかに不信なりとも御慈悲にて候ふあいだ信は得らるゝなりと仰せらるゝ。　此御言がめあてぢや。　無宿善といはれて、あい私が無宿善で御座りまするとすてるのが無宿善。　無宿善ならばなんとしやうと驚く心が、はや宿善の印ぢやと、どこまでも聽聞をいやがるこの心をすかしてな

りとも、たのんでなりとも、理窟づめにしてなりとも、聞き付けさせずは置くまいと張込む心があるなら、ば受合ちや。いかなる不信のものなりとも、得らるゝぞと仰せらるゝ。

三〇

明信老人いはく。大坂に一俳優ありき。泣く事を稽古しても〳〵眞の情うつらず。江戸へ行き當時の千兩役者につきて親しく習ひしが、まだそれでも〳〵とて許されず。最後にはあまりのことにて本眞に泣き出したり。其とき師匠初めてそれでよし〳〵と許したりと。

三一

江州長濱のさだ女、香樹院講師に隨ひ、聞ても聞ても疑が晴れず、加賀まで隨ひ行きしが、師いはく。雪も降り寒くもなるゆゑまう歸れ。さだ女いはく。私はどうも信ぜられませぬ、疑が晴れませぬ、聞えませぬがいかゞ致しませう。師いはく。そのまゝ稱へるばかりで御助け。其外になにもいらぬぞ。

三二

梅逸は有名なる畫工なりしが、深く本願を信じて念佛せし人なり。明信老人について聽聞せりと云

ふ。此人梅をゑがくに殊に妙を得たれば、或人、先生の梅は格別氣韻たかしと賞讃せしとき、梅逸いはく。私が梅をゑがくのではない。梅が梅をゑがくのぢや。

三三

明信寺の手牒の中に。

祖師聖人の御歌なりとして。

なにごともしらぬこの身をそのまゝに
みちびくたねは彌陀にこそあれ。

あたゝかにかさぬる冬のあつぶすま
臥す間も法のめぐみわするな。

三四

香樹院講師いはく。眞宗の僧侶は聖道門のむつかしい修行をするかはりざやと思ふて精出して學門せよ。

三五

同師、嘗て丘誓堅を誡めての仰せに。學問は外道もする。提婆は學問して六萬藏に通じ、五神通まで得たと云ふが、生きながら無間に墮したり。何程學者になりても、我身の出離生死の大事に心掛けずば、袈裟かけたる外道なれば、無間地獄は覺悟して居れ。

三六

香山院講師、或年加賀山中に一週間ばかり入湯せられしが、入浴の前後常に書見に餘念なかりしかば、宿の主人尋ねて曰く。御講師様は大學者にてあらせらるゝに、さういつまでも御勉强遊ばさるゝは如何なることにて御座りまするか。師いはく。おまへは此邊の財産家ぢやが、もう金を溜ることは止めたらどうぢや。定めてやめられはせまい。おれもそれと同しことぢや。この書見は、死ぬるまで止めることは出來ぬわい。しかし金も學問も往生の爲には決して間に合はぬ。往生極樂にはたゞ他力の信心ばかりであるぞ。

三七

仰誓師の箸紙の表に。

かゝもつてさかなくはしやる坊主たち

非俗のわけもちとはしらしやれ。

朝夕の恭敬のこゝろは欠くとても

御扶持はかけず今朝も夕も。

三八

ある人明信老師に尋ねて曰く。米安心にして說法するは眞の不淨說法なれば止むべきや。師曰く。當流は罪の沙汰無用なり。一として罪ならざる所作はなきゆゑなり。然るに佛は平等の

大悲ゆゑ何を縁としてなりとも得信せしめん思召なれば力を盡して說聞すべし。其慚愧の心より說くうちには、世間にて云ひかぶりと云ふごとく、他人に聞かせやうと思ふて說く聲が我耳に入りて、かへりておきかせにあふことあり。

三九

加藤法城いはく。おれもちつとほんまの說敎が出來る樣になつたやうぢや。その證據には何處へ行つても參詣人がすくなうなつた。

又、福順寺後住を誡めて曰く。人が說敎が有難うなつたと云ふならばよいが、上手になつたと云はゞ

說敎は止めにせよ。

四〇

等覺老師いはく。人に用ひらるゝが法義には第一の魔障なり。人の來るのは恐ろしいことなり。

又曰く。予は說敎の出來ざるが佛陀の大善巧方便なり。世間には隨分後生に望みある者が、大半聞かせ氣になつて我身の出離を失ふ。恐るべきことなり。

四一

大量師いはく。後生を心に掛け、念佛申すと人が出て來る。物など持つて來れば早や我身に德のあ

るやうに自惚れ、他人にいふて聞かせるを我領解の如く思ひ、法義は手に入りたる如く心得、後生を誤ること明なり。それゆゑ、時々我頭を打つてくれる人に逢ひ、世間では山子坊主、狸道心、犬坊主と辱しめられ、貶められる位でないと、末通つたまことの後世者にはなりがたいものぢや。

又いはく。多くの人は聞くに心をつくさで、心に心をつくして居るものばかりぢや。

四二

稲葉の妙慰いはく。この心はどうしても、ちよつとも、きいてくれぬと云ふことの知れるまで聞くの

ぢや。

また或人いはく。ちよつとでも佛法の水につかつて居ると思ふたら間違ひぢや。

四三

長松いはく。地獄へ墮つることを何とも思はぬ丸夫心ぢや。地獄のことが出ると笑ひ出す。

山中靈城いはく。地獄と聞いても何ともなし、極樂と聞いても何ともない、この何ともない心を助けるぞと仰せられる。

四四

明信老人いはく。この心は飼ひばなしで法を聞

くばかりぢや。

四五

宮川の妙仲、他人來りて、胸の晴れぬを語るとき曰く。如來樣は御急ぎぢやぞや。彼尊は實に御いらだちゞやぞ。このまゝ南無阿彌陀佛といたゞくのぢや。

四六

江州山田の長安寺、世間の用事を兼ね明信老師を訪ね、一言の御示を願ひたり。老師は破れたる法衣を纏ひ奥の間より出て來り、兩手に仕事はできぬと、一言いはれたるまゝ奥へ這入て再び出でられざり

しと云ふ。○其後、長安寺は自身の求道心の薄かりしことに心付き、專心に聽聞せられしと。

四七

香樹院講師に問ふて曰く。往生ほどの大事を持ちながら貪欲瞋恚にほだされ、愚痴なことを思ふて居りますが、是は往生の障にはなりませぬか。師の仰せに。是はやめとうてもやみはせぬ。この身を土にして仕舞はねば已まぬ。是れ凡夫の僻なり。

四八

明信寺のいはく。我機の方はさつぱり忘れて彼

方の五劫の御念力が我心になつてみれば心底から樂まれるばかり。是れを深くたのむと云ふ。

四九

同師の仰せに。善知識の御化導を御註文の如く思ひ、教の如くならんとしても、それはなれぬ。喩へば紙で鶴や船の形を折つて小供に與へる時は、暫く眺めて居つて直ぐ解く。やがて元の如く折らんとするも出來ぬゆゑ泣き出す。今もその如く仰の如くならんとするも金輪なれぬ。たゞ仰のまゝを聞ばかり。

五〇

或人、私は助け給へとたのめと仰せらるゝ御言が何となく氣に聞へて頂けかねます。明信寺これに答へて。それは我身の居り場を忘れて聞くゆゑなり。もし深山に踏み迷ふて日は暮れかゝる、今夜は狼の餌食となるより致方はないと心苦しく思ふとき、一人の人が來て、自分がつれて行かうと云はゞ、その人を底氣味惡く思ひながらも、なにとぞ誘れ出して下されと縋るであらう。これ現今死地へ陷りたる身なりと思ふがゆゑなり。況や大悲の親樣の仰を知らせていたゞき、たのめよ、すがれよと勸めたまふ御言に於てをや。

又曰く。後生たすけたまへの御言にこまる位の聞き心では、たとひ千年聞いても本願に歸する時はなかるべし。

五一

又或人の尋ね。『後生たすけたまへと思ふこゝろひとつにて、やすく佛になるべきなり』とのたまふが、せめて念佛百返せよとでもあらば、さてもと受けらるべきに、あまりに篇もなきやうに思はれて受けられませぬ。

明信老人の答へ。多くの兒童に玩具を示して欲しいものに與へんとするとき、其中の一童があれは

虚偽ならんと分別して私欲しいと云ひ出さぬとせよ。されば此の子は貰ふことはならぬなり。これ望みの薄きがゆゑなり。くれ手ではわけへだてなく回向る品なれば、欲しいと云ふものへは皆與へらるゝなり。

よく〳〵我分を考ふべきことなり。

五二

香樹院師、越後吉田の同行に對せられ。其方はまだ無明の病が分らぬゆゑ、聽聞で御助け引きつけて喜んで居るが、後生大事の思ひで精出して聞き〳〵念佛申すと無明の病が出てくる。

其疑破つて下さるゝが御化導の御力ぢや。

五三

明信老人いはく。さう何時までも聞いて居るのが善いことではあるまいけれど、長う聞かぬとろくな聞きやうも出來ぬ。

五四

伊勢藤村藤七いはく。一日も御化導は離れられぬ。或人いはく。それでは何時までも決定の時はないか。藤七曰く。早く領解して氣儘に暮したいと云ふ、その心根がにくたらしい。

五五

香樹院講師いはく。耳に聞く時ばかりが聽聞ではない。寢ても醒めても彼尊の仰を思ふが聽聞なり。よこしま心を止めて教を思ふなり。彼方の助けてやると仰せらるゝことばかりを思ふなり。

五六

竹内こう女いはく。聞けばきくほど、きゝたらぬ斗りで、心は安穩ぢやと常々申されたり。

或人いはく。この一言の中に聞えこゝちと、きゝごゝちの二あり。

五七

或人いはく。聽聞で聽聞がすたる。聽聞してみ

ると聽聞の功ではいかぬと云ふことが知られるなり。起きてみねばもはや腰の拔けてあると云ふこともし知れぬなり。

五八

明信寺いはく。きこべたで、もうよいと云ふことではない。私の方は忘れてもあなたの御心が我心になつてみたなら忘れられまい。今手を組んで眞逆さまに墮ちるこの私を、聞きうる一つで助けて下さることが本眞に御受けが出來たら、どう忘れられう。こゝ一つを能くく聞くのぢや。善知識の御慈悲のまゝが我領解になるのぢや。

五九

悅淨師いはく。淨が世に生れしは何の爲ぞ。寺相續の爲ならず、御堂再建の爲ならず、同行敎化の爲ならず。是等は皆序なり。唯佛にならんが爲なり。序の事に身を入れて其事忘るゝ身こそおかしけれ。

六〇

小川謙敬、香樹院講師へ申しあげて曰く。私は慚愧して念佛申すばかりで御座ります。師曰く。腹からの慚愧かしらん。口先ばかりの慚愧ではなきか。心底から、やれ愧かしやとなつたは如來樣の御回向なり、と。

六一

又同師、岡崎御坊にて御法話の後尼講の面々が御禮に罷り出で有難う御座ります〳〵と、申しあげたれば仰せに。無明の大病をうめて置いてありがたい〳〵と云ふてゐるのか。

六二

讃岐庄松いはく。御慈悲〳〵とおつしやるけれど、聞いた御慈悲でおちこむぞ。

六三

樂信院大量師の入信心得に曰く。

一。人多く佛智を向うに置いて信じにかゝるゆゑ六ケ敷、退いて自省すれば願生の心即欲生の呼聲の屆きたる他力の惠なり。

一。人多く彌陀は只後生のみを助ける佛と思ふゆゑ大悲が信じがたきなり。

一。人多く彌陀の法界心を知らぬゆゑ危く思ふ。これ論主の十字號を示し給ふこゝろをうるにあり。

一。人みな說教をきゝに參るのみ。助け給ふ佛祖の御召出に預るを喜ぶ人なし。故に法義者のみにて信佛者なし。

六四

大量師は一蓮院秀存師と道交淺からざる間なり

き。大量師、嘗て京都岡崎に住じ給ひしとき、出離に望み厚き同行ひきもきらず尋ね集り、一時は頗る盛なりしと云ふ。秀存師このことを聞き給ひ、大量師が自身の出離を忘れて聞せ屋となれるを諫めんとて、一日大量師を岡崎の居に訪ね給ひしが、やがて秀存師自ら氣付かせられ、聞せ屋とはわがことなりとて一言も言葉をかけずして、そのまゝ歸り給ひ、それより後は一入御自身の出離に心掛け給ひしと云ふ。

六五

大量師より一蓮院師へ。

むらさきの雲におひをかけながら
ねがふこゝろのいとうすくして

大量師への返歌に。

むらさきもしろきもいはずわれはたゞ
むらくもながらおくらるめやも。

六六

德母院良雄擬講師信後の心得一概すべからざるに就き、十二條を擧げて曰く。

一。信を得たりと思ふ機に信を獲得したる人もあるべし、又未安心の人もあるべし。

一。信ずる一念がたのむ一念、たのむ一念が信ず

る一念なりと心得たるに正義あり、不正義あり。

一。疑なきは信なりと心得る機に正義あり、不正義あり、

一。後生たすけ給へとたのむが信心なりと合點したる機に自力あり、他力あり。

一。後生こそ一大事なりと思ふ心、信前にもあり、信後にもあり。

一。かゝる淺間敷機を御助けと信ぜられたる人にも歎く機あり、喜ぶ機あり。

一。懈怠いかゞと歎く機に未安心あり、自力あり、他力あり。

一。一念も歎く心なくよろこぶ機に邪見あり、自力あり、他力あり。

一。かゝる淺間敷機をたのむ一念に御助けと信ずる機に正義あり、不正義あり。

一。信後の思ひに住しながら慚愧懺悔する機に自力あり、他力あり。

一。念佛は申さねばならぬと勵む機に自力あり、他力あり。

一。報謝の經營勵み勤むれば快く怠れば心地惡と云ふ機に自力あり、他力あり。

伏明師の隨筆に曰く。

たのむ一つで參らるゝ——大經——善もほしからず。
罪は如何程ふかくとも——觀經——惡もおそれなし。
夫に違ひないとの證據——小經——右の請合なり。

六八

又同師の歌のなかに。

うれしうもまたかなしうも思はする
欲のきつねが人をばかして。

六九

世の中は唐臼柏子にさも似たり
うれしがつたりかなしがつたり。

香月院講師いはく。そなたの安心は、間違ふてゐると、たとひ三歳の兒童が云ふても、何處が間違ふてゐると爭ふはよろしからず。いつも、たゞ間違ひどうしの私をと信じたがよい。

七〇

同師へ或人の尋ねに。私は聽聞のたびごとに決定するやうに存じます。

仰せに。それが有難いことぢや。かはるのなれば惡いが決定するのなれば、ありがたいことぢや。

又申しあげて曰く。私を御助けに違ひないと決定いたして御座まず。

聽聞するほど御助け下さる

ことが聞きたう御座ります。

仰せに。何返寺へ参りて御助けと云ふことを聞いても御助けにちがひないと決定したのがたのんだのぢや。

七一

悅成師いはく。御助けは助け手の御手柄にあり。行者はられるなり。そのられての機は十悪五逆と女人、さて助け手は五刧永刧の御手數なり。られては樂なものなり。助け手の難儀思ふべし。られては唯仰せの勅命をはい〳〵と聞きうるばかりなりられて何樣なるなれば往生を遂ぐるなり。我か思

ひやわが稱へぶりで往生遂ぐると思ふに非ず。助けられて往生を遂ぐると信ずべし。

七二

教信同行へ或人尋ねていはく。このまゝで御座りますか。教信いはく。このまゝの御助けと聞いて覺へたばかりでは淨土參りはならぬ。迚もたすかられぬとよく〳〵思ひ知れたが凡夫の木地のみへた所で夫をそれなりで助けてやらうとある御慈悲ぢや。我身を顧ればこのまゝより外はない。

香樹院講師いはく。如來の御思案はこの私が助かられぬ後生と云ふことをきゝつけさしてて下さ

るゝなり。

七三

如説院惠劒講師が手記錄に載せられたる自督帖。

一。爰に愚老、當年滿七十歳の懺悔あり。當年までも自分の信心の眞僞は已を顧るのほかなしと、謹みて相心得て居る〳〵と思ひ暮せしが、近頃無始已來の初事に眞の善知識の御實意がこの心中に徹入なし下されたるにや、創めて自ら己が不埒の心中が思ひしらるゝ。

二。幼年の昔、彌陀の本願は我をたのむものを必ず助けんとある御誓なりときゝて、我心に徹到して

難有く、かゝる淺間敷きこの身が如來の御助けによりて極樂に往生するとは、さて〳〵ありがたや南無阿彌陀佛と喜び稱へたるばかりなり。

三。然るに大祖聖人板敷山の件、幼稚のときはこのこと聞くにつけても憎さもにくしと腹立て、或は落涙に堪えかね、妄想ながらも我一分の報恩のために報讎せんと思ひしに、一年は一年その妄想も薄くなり、幼稚のすがたにもならばやと次第に昔戀しく思ひしが、四十は〳〵、五十は〳〵、七十は〳〵、と年とるに隨ひて譯は委くなれども內心の實情はうせはてたる有樣、まことに淺間敷くなり下りたると云ふ

より外はなし。

四。 獲信の一念より報謝相續して臨終一念の夕にはかならず往生せしめ下されなば不可思議にありがたかるべしと領解して喜びくらすゆゑ身一杯心一杯と思へども、その身一杯心一杯が煩惱具足の凡夫ゆゑ、まことに喜びもせねば稱へもせぬといはれても、一言の申しわけもなき恥かしさは我身なりと、七十歳の今日まで相續し來れり。

五。 しかれどもこの心相續の相は千變萬化、あるときは佛恩の忝きことを存じ、師恩の深きことを思ひては歡喜の涙に咽び、雨涙千行萬行することもあ

り。或時は口に稱名すれども心には思ふまじきことおもはれて暫くもとゞまらず、妄念頻に動きて佛恩も師恩も夢にだにもしらざるものゝごとくなる時もあり。また或時はかく前後轉變する心何ぞ淳一相續の心ならんや、これぞ若存若亡の心なるべしと歎かるゝ時もあり。またあるときは、かく前後轉變すと云へども如來回向の一心はこの中に歴然たりと聊か動ずることなく稱名することもあり。種々無量にしてツイに七十歳を送れり。

六。 就中踊躍歡喜の心相の起ることは甚だ以て希に、後世者にはあらざるやと怪まるゝの心はつね

に多し。ことに年老の長ずるに隨ひては、ます〳〵疎略の相となりはてたるに似たり。あさましと云ふもおろかなり。

七。 かく心相は種々に轉變すと云へども口稱の念佛は轉變するものにあらざれば、他力の往生は違ふべきことなしと喜び存じて一生これまで送り來れり、然ればありがたいかなや他力の信と行とは幼年の昔よりすでに獲しめ給へり。この身なれば今にも臨終せば決定往生すべきこと何の疑あらんやその他力回向の信行は如何して得たるや。これひとへに眞の善知識に逢ひ奉りし恩德のあらはれな

れば、その恩德の深きことは、まことに彌陀の悲願にひとしきものかと常に厚く頂戴して、粉骨碎身すともなほ足らぬと、尊慮に違はぬ樣つゝしみ〳〵年月を送れども、報謝の勤め勇ましきすがたもなく不冥加の心中と誤りはゝて日を送り來れり。

七四

皆往院講師曰く。

總じて眞宗の同行は念佛の稱へやうが足らぬ。稱へれば極樂へ參られぬと云ふ自餘の淨土宗の自力の人さへ、數珠爪繰りて百萬遍となへる。今家の安心は一念の處にて往生定まる嬉しさに稱ふる念佛なれば、自餘の淨土宗よりもも

うちつといかいこと稱へねばならぬのに、坊主を初め報謝の稱名を萬人講の帳につくやうに思ふて居る。三文でも善し十文でも善しと云ふごとく、一念歸命で往生はしてやりたが報謝の稱名は志次第ぢやと思ふて居る。申さうと思ふてさへ稱へられぬのに申さうと思はずに念佛が稱へられやうか。名聞にも稱へられやうぞ。念佛は人前ばかりではない。夜の寢覺にも朝起きる時にも、一念歸命の信心一つで助けて下さると思ふたら、その嬉しさに念佛は稱へられねばならぬ筈ぢや。

寶景師、大井川、川止の節遠州の同行へ遣はされし文。

なんにもいらぬ、念佛するばかで御助けり。念佛するばかりではあまり易いと疑ふものがあるが、易くしてくれたいとて、彌陀は五刼永刼の御骨を折りて下されたのぢや。念佛するばかりで助かるが願力の不思議と云ふものぢや。まだ疑ふもの故『彌陀經』に諸佛が證據に立つたのぢや。念佛するばかりで御助けぞと知りたが夫が信じたのむのだや。それを『御文』に、ふかくたのめと仰せられたのぢや。信ずると云ふも、たのむと云ふも、念佛するばかりで願

力の不思議で御助けぞと知ることぢや。根機のよいものはたんと稱へる、根機の薄ひものはちつと稱へる。我根機次第に稱へよ。御助けに間違ひない。在家には六ケ敷ことは云ふな。念佛すべし。

七六

香山院講師いはく。うたがひ、はからひなく願力を深く信ぜよとすゝめ給ふが祖師覺師の御すゝめ。蓮師の御代に至りては、もろ〳〵の雜行雜修をなげすてゝ一心一向に後生たすけ給へと彌陀をたのめとすゝめ給ふ。その御言葉のふり一轉したるやうにこゝろえられて、心底よりこゝろよく領解受得し

て、げに祖師以來の正意をかゝげて愚夫愚婦のために委しく示したまひたと心得るものはまれにして、やゝもすればひそかに口稱をつのり、或はたのむとのたまふ言葉において種々取捨會通を設け、或はひたすら蓮師の御言葉において確執し、つのりを生じて、祖師覺師の御すゝめに不足未盡の心を生ず。みな過不及の誤なり。

七七

或人香樹院師へ申上げて曰く。こんなこゝろではと云ふこゝろが、はなれられませぬと。仰せに。その心だからよく聞くと、その心目當に

起して下された御本願ちや。

七八

長松いはく。五十年の聽聞脊中に負ひねて、地獄丸裸のなりで、御大恩が喜ばれます。不思議な事でございます。

七九

香山院講師いはく。『御文』の我身はわろき徒者なりと思ひつめてとある、思ひつめると云ふことは如何に思ひつめるのか。これはもう少しも相手にならぬこと。よくても悪くても目をかけず、とんと相手にならぬ事を云ふのぢや。

八〇

伏明師いはく。法然上人は世間の人にまぎれて念佛して淨土にむまるゝと。蓮如上人は信心の人にまぎれて地獄におつるが悲いと。

八一

或人、一蓮院講師に私は年をとりまして三毒はいよ〳〵手強くなりました、これはどうしたことで御座りませうと御尋ねしたれば、仰せに。若し三毒がなかつたなら極樂へ參つても、三光かけた片輪な佛になるであらう。

八二

参州のおその曰く。何もかも向ふからちやく、といふて居るのは違ひますげな。いふて居らぬでも何もかも向ふさまからちやげな。

八三

或る人、香月院講師に向ひ恐れながら私の領解を御聞きくだされ、此間さる同行が私の信心が違ふてあると申されまして、それを聞きましてから、心の置きどころが御座りませぬ、と申し上げたれば、仰せに。それを何の案じることがある。本願が違ふたといふではあるまい、聞きやうが違ふたといふのであろう。違ひどうしの私をと信じたがよい。

八四

稲葉の妙意いはく。私が忘れるで彼方が忘れておくれぬ。私がはなれるで彼方がはなれておくれぬ。私が思はぬで彼方が思ひづめにしてくださる。

八五

慧空講師いはく。歡喜の心のすくなきを歎くは信心の色なり、法の命なり。喜びても喜び足らぬと思へばこそ信心は相續するなり。このこゝろのなからんは多くは安堵懈慢の人なり。安きに居て危きを忘るゝなかれ。

八六

香月院講師いはく。わが機で落ち付かるゝことではない。我方で安堵することてはない。善知識の御化導の慥なことをきいて。それで落ち付くことちや。よくきいて安堵することを。御開山は、歸命とは本願招喚の勅命なりと宣ふ。とかく聞いて起る信心とあれば、よく〳〵念に念を入れて精出して聞け。また同師の仰せふ。ぬけ出た有難いものにならないでも阿彌陀樣はやう御助け下さるゝ。

八七

一蓮院講師いはく。どうもなられもせぬが、微塵

ほどでもどうかなられたといふことあらば他力は立たぬ。そのまゝ助けられて、永却の手柄を彌陀にさせてくれよと仰せられるわい。

八八

栗尾太助いはく。いかほど上手に聽聞しても、領解の仕上げはどれだけ立派に出來ても、此機は落ちねばならぬ。この落つる機に御助けの法は離れてくださらぬゆゑ、いやでも御助けは免れられぬさうな。

八九

江州新井の妙慰、香樹院講師へ、どうも私は信ぜら

れませぬ、と申し上げたれば、師の仰せに。今丈なりとも信ぜよ。後の事は構ふことはない。

九〇

伊勢の信道いはく。間に合ひさうな心が起つたら、そのまゝ直に捨てゝしまへ。

九一

一蓮院講師いはく。勝つに骨折るが慢、負けるに骨折るが佛法なり。

九二

開華院講師いはく。どこまでいつても、彌陀にたすけられて往生するぞと信じて念佛する外なし。

蓮師にあふても、祖師にあふても、法然上人にあふても、釋尊にあふて聞いても、それより外のことはない。若し釋尊の御言に嘘があつたら、どうするぞ。そうぢや、三千年も續いたうそなら、嘘でも尊とい。況や如來如實の金言をや。

九三

香月院講師、水井吉良右衛門等に對しての仰せに。そちたちのやうに參るものは、とにかく善いものになりたがつてどうもならぬ。善い者にならぬやうにしたがよい。

水井氏いはく。善い者とは思ひませぬ、よく〳〵

悪いものと思ひます。

師の曰く。善い者にならぬので仕合ぢや。内に遊んでゐて參らぬものを見ての心得を、いふて聞かせるのである。參らぬものは、そちたちよりは百倍善いものぢや。如來様の御本願はそのやうな御手の廻らぬ御本願ではない。悪人正機といふは、そこにあることと。正機といふは、いつちの正客といふことぢや。參らぬものは善いものぢやから、後へ御廻しなされて、そち達のやうに百倍悪いものを捨ておいては、我淨土へ引きつけられぬと思召して、御念力で、いつち先へ御引きつけなされて下されたのぢや

程に。さやう心得たら、我身の悪さを知りて、御恩を尊ぶやうに心掛けねばならぬぞよ。

九四

或人香月院講師に向ひ、お助けに間違ひないと決定いたしましたが、どうもありがたうございませぬと申しあげたれば、師の仰せに。佛はありがたい心がはしくば、どれほどでもやらうと仰せられる。併しながら貰うて何にすると仰せられたら如何するぞ。

九五

長松いはく。信を得たら有りがたい者にならう

と思ふたら、我身の悪さがありだけ知れました。

九六

皆乗院觀月嗣講いはく。皆人の知りがほにして知らざるは死ぬる事、知らぬふりして能く知るは色の道なり。三界火宅の中に喜戯して驚かず怖れず。今日すでに過ぎぬれば命隨うて減ず。歩々念々死地に近づく事、屠所の羊、少水の魚の如し。こゝに何の樂かある。一息かへらざれば、最愛の子もおそれを生じて床に近よらず、重恩の眷屬も臭氣を厭ふて野邊の送りを急ぐ外なし。

九七

惠琳講師ある病僧に遣はさるゝ消息。

彌陀の本願とまをすは名號をとなへんものをば極樂へむかへんと、ちかはせたまひたるを、ふかく信じてとなふるがめでたきことにて候なり。一向名號をとなふとも、信心あさくば往生しがたく候。されば念佛往生とふかく信じて、しかも名號をとなへんずるは、うたがひなき報土の往生にてあるべく候なり。

右、祖師聖人、有阿彌陀佛へ賜はる文の御言なり。三部妙典の肝要、三朝列祖のすゝめ、この數語につきずと云ふ事なし。余深くこの語を事とす。故にこ

れを書して送るのみ。命かぎりあれば、やがて證得しつる往生のことわりあらはれて、勝縁勝境悉現前を樂みて、かの覺信坊の樣にはんべれば目出度事なるべし。あなかしこ。半座をとゞめて、この芳契を忘るゝ事なかれ。

九八

明信寺いはく。法はもと凡夫を活佛にする活法なり。信心は嬉しや有難やと渴して甘露を仰ぐ如く、よりかゝりよりすがる活きた心なり。

九九

伏明師いはく。世間において賴むと云ふに二つ

あり。一つは己が望むことを適へてかゝること、二つは己が望むことを適へてもらふこと。此二つを平語に云はゞ、どうか御賴み申しまするとさやうならば御賴み申すとの二つなり。この二つの中、初は難也、後は易也。

一〇〇

同師瓢の繪に題して。

はかなきは人間一生酒一升
あるかとすればやがてなきかな。

またの歌に。

柿をみて家事の苦勞もいとはじよ

しぶさまさればあまさまされり。

一〇一

或人、一蓮院講師に問ふて曰く、恐れながら、あなたの御安心は如何でござりますかと。

師の仰せに。おれの安心は七五三の楷のやうぢや。あちらへふら〳〵こちらへふら〳〵。しかし元締が丈夫なで、落してはくださるまい。

一〇二

江州の興市いはく。賭博打と後生願ひとは、凝れば凝るほど裸になる。

一〇三

ある信者いはく。佛法と相撲とは、上手と組み合はねば所詮がないぞ。

一〇四

惠空講師いはく。諸佛には種々の簡びあり。故に此方より付きまわつて勤める。誠にさこそありぬべき。我等は佛の方よりつき添はせられ、上根も下根も共に追ひまはして助け給ふ。

一〇五

江州のおかる、老後耳が遠くなり、説教の座に出ても、聞こえかぬる樣子ゆゑ、ある人氣毒に思ひ、おかるさん、聞こえたかいといへば。はい、御法話は半分

ばかりよりきこえなんだが、如來樣の御喚聲は、ようきこえた。内に居ても聞こえどほしで嬉しうござる。

一〇六

或同行、香月院講師に申し上ぐるやう。私はもう、天が地となり地が天となる例はあるとも、御助けは一定と慥に信じて居ります。

師の仰せに。そんなに確りならずとも、阿彌陀樣はよう御助けくださるぞ。

この御諭を越後の眞信尼、參州の同行より聞きて、一蓮院師に申し上げたればもう一度聞かせて

くれ〳〵と、三度まで仰せられ、兩手拍ちて喜び給ひしと。

一〇七

或人香樹院講師へ御尋ねして曰く。これ仕損じては、もう取返はないと云ふ心が常に起りますが、これは往生の障になりませぬか。

師いはく。それは往生の障にはならぬ。よくよく心得れば却て喜を增す種になるぞ。

一〇八

或人、江州大濱の吉右衛門の老媼に遇ひ、胸のもやくやを話せば、老媼、私もさうぢや、澤山あるが、そのま

ゝ積んで置く、天にもとゞくだらうと思ふ。それをどうするかと尋ねたれば。何をいふぞい、今死んでゆくものが、そんなものに相手になつて居られうかい。

一〇九

香樹院講師いはく。助かるか助からぬかの案じげなしに、我をたのめの仰せぢやぞ。

一一〇

伏明師いはく。安念は客の如し、念佛は主人に似たり。家の内に主人だに居なば、たとひ悪しき客なりとも、みだりに不法の事はなすまじき也。強ひて

安念をとゞめんとするは、悪しき客と爭ふが如し。いとわづらはし。爭はざるに如かず。世の諺にも、さはらぬ神にたゝりなしとや云ふめる。されば兎角かまはぬが手にて侍るなり。此意を行仙上人の歌に、

あともなき雲に爭ふ心こそ
なか〳〵月の障りなりけり。

と詠ぜり。これ相傳の口訣なり。

一一一

また同師の曰く。なに事も報謝と存ずべきなり。婦の夫に仕ふるも、子の親に事ふるも、親や夫の恩を

報ずるのなりと思へば、夫や親が喜ばずとも腹はたゝぬ也。阿彌陀様に向うて、なにの暇ありてか外のことを思ふぞ。たゞ御恩報謝と存ずべきなり。

師の歌に。

親のもの子のものなりときくからに
彌陀の功徳はわが功徳なり。

一一二

知道師いはく。自性が分らぬ。自性の分るまで骨折つて聞け。自性が分らぬゆゑ、聞こえたやうでも、又法が崩れる。

同師の歌。

よしあしのきのかいかぶりやめにして
つぶしみこんだ彌陀にうりこめ。

一一三

香山院講師の手記に載せられたる香樹院講師の話に曰く。よく〳〵我胸抑へて見れば、我胸がどうやら薄暗いやうで、手強き人の傍へ寄りて見れば、いよ〳〵參らるゝ身とも思はれず。それならば地獄へ落つる氣かといへば、敢て落つるでもなし。ほんに中にぶらりとして居る心中。只まだ死ぬまい死ぬまいと、此分ではすまぬ事ちやが、其うちには難有うなられうと抔と思ふて死ぬる死に際にはと思ふて居

るは甚だ危ないと。

香山院講師御言を添へて曰く。道は少々まはりても、欄干附の橋を渡るべき事なりと。

一一四

同手記に曰く。各や我々は欲を起す時も心の底から起す。腹立つ時も心の底から立つ。たゞ佛法聽聞のことになると、ほんのうはべで聽聞して居る。煩惱を起すほど心に染みたら、いつの昔に信者になりて居るであらう。

その心に染まぬが業障のなしわざなり。

一一五

永元寺教道師の『百條法話』に曰く。以前は煩惱にさへられて御恩を忘れたり。今は煩惱に助けられて御恩を喜ぶなり。

一一六

松林了英子、伏明老師の門を辭して歸國せらるゝとき、師のよまれし歌。

阿彌陀佛のちかひしなくばいかはかりかなしかるらむ。

又萬里咫尺の意をよみて、

今日のわかれはかなしかるらむ。

信ずればいのち一つをへだてにて

淨土にちかきこの世にぞすむ。

一一七

長松いはく。私は一生地獄の釜底で聽聞がしてゆきたい。

一一八

江州半六の母、常に何故だらう何故だらうと云ふ。何が此尋ぬれば、こんなものに、こんなことが聞こえたのは何故だらう。

一一九

ある同行、三河のその女に、おまへの御信心を聞かせて下され此頼みしとき、その女いはく。私は愚な身の上、御信心の御安心の此いふて、慥な

領解が胸にあるやうな私ではなけれど、如來樣がおその愚で信心も得られぬが、その信心が得られねば淨土參りはならぬ、地獄へ落るより仕方がない、その仕方のないものを、おそのまゝ願力の不思議で助けてやる、と仰せ下さることが嬉うございまする。

一二〇

尾張の幾助、京都へ參詣の途中、江州彦根にて磯の與市の野菜を商へるに逢ふ。與市いはく、嗚呼うらやましや、私は加樣な淺間敷い日暮でまことに御恥敷ございます。

さきの同行自分の胸を指していはく。こゝさへ

明るければよいでないか。

與市いはく。私はなあ、そこは明うても暗うてもかまはぬ。

一二一

海東講師いはく。たのませて助けんと計はせ給ひたる攝取の先手より、御助け一定の後手があらはるゝ。彌陀は先手、行者は二の手。このことわりを忘るべからず。

一蓮院講師いはく。強き碁うちは三十手も三十手もさきが見える。弱き碁うちはさきが見えぬ。われらは弱き碁うち也。阿彌陀樣は強き碁うち也。

一二二

威力院講師の遺訓。

『和讃』に、子の母を憶ふが如くにて、衆生佛を憶すれば、現前當來とをからず、如來を拜見うたがはず、とは、彌陀をたのむ行者、稚な子の母を念ずるに喩へたり。これに十喩をもつて、その趣を示すべし。

一。稚な子は無分別なるを、他力の行者の自力の思慮をはなれたるに喩ふ。

二。不淨を知らざるを、煩惱惡業に目をつけざるに喩ふ。

三。清淨を知らざるなり。信者よき心起ればと

て、これこそと高ぶる心なし。

四。母に物を參らせて氣に入らんと阿るこゝろなし。他力の行者は、まひらせこゝろなし。

五。餘人を慕ふこゝろなし。一向專脩の行者は、餘佛餘菩薩へ追從のこゝろなし。

六。母を慕ふ如く、彌陀一佛のほか餘念なし。

七。母を思ひ出す如く、彌陀一佛を憶念するなり。

八。母を慕うて泣くごとく、稱名の聲を出すなり。

九。母より外にたしかなる人なしと思ひ、たゞ一人によりかゝりうちもたれて居るごとく、地震雷等の急難にあふとも、彌陀一佛にもたれて餘念なき也。

十。もしや捨てられんものと疑ふこゝろなし。彌陀一佛に不捨の誓約あり。一度光明に攝取せられし身は、永くすてらるゝ憂ひなし。

一三三

一蓮院講師いはく。改悔出言するに五由あり。

一。爲敬白信受奉行故。

二。爲欲蒙知識批判故。

三。悅豫心中溢言語故。

四。爲激發同座聽衆故。

五。爲慚愧不敢遺失故。

ある人、香樹院講師へ申し上ぐるやう。信心を得るまでに行ずる行が御座りますか。

仰せに。そうぢや、ある。行とは南無阿彌陀佛ぢや。

樂心院いはく。この一言念佛法門をあらはす實敎也。『御文』に「念佛法門」、又は「念佛の信心」、又は「念佛修行の人數ばかり」と簡び給ふこゝろこれなり。法門知らずに信心沙汰するは、佛像なしに開眼を求むるがごとし。

一二五

美濃のいや女を京都より態々尋ね來りし源七な

る年若き同行、いろ〳〵相談して歸るとき、いや女その人を呼びとめて。

あにいさん、これから後に、お前さんの胸にこれと云ふ魂ができたら、御開山の御罰を蒙むつたのぢやと思ひなされや。

一二六

江州大濱の吉右衛門の老嫗いはく。この婆々は一生涯信心がえたい〳〵と願ひましたれど、信心與へると、この婆々は怪我すると思召し、とう〳〵今日まで信心與へて下さらなんだ。まるきり助けられねば參られぬ婆々であつたと、御助けに逢はせても

らひました。

一二七

或人江州木ノ濱の茂平に、私は後生が大事にならぬので困つて居りますが、如何すればよろしいか。茂平曰く。大事にならいで仕合せ。後生が眞實大事になつたら、家も藏も妻子も棄てゝ此邊には居れまい。

茂平、後年老耄して友同行の宅へ行き、酒があらば一杯施したまへといふ。家人なしと答ふ。茂平自ら井戸より水を汲み來りて飲みながら、是は甘い酒ちやといふ。家人云く、おまへさんも大分に老耄ら

れたな。茂平忽ち色を正しくして云く。此方はいかほど老耄でも、如來樣は確かでくちつともおぼけなされぬで、御助に間違はない。

一二八

或年幼き僧開悟院講師に詩文の事を語りたれば、師曰く。

それも結構ぢやが、淨土眞宗の僧侶は、詩よりも、文よりも、また歌よりも、南無阿彌陀佛の學問が肝心ぢや。貴公はまだ南無阿彌陀佛の學問が足らぬ。もうちつと南無阿彌陀佛の學問を致されよ。上は三經から下は御文まで皆名號讃嘆の外はない。宗部

を學ぶと云ふことが卽ち南無阿彌陀佛の學問をすると云ふことぢや。

一二九

宣明師いはく。たのむこゝろが御助けのこゝろなり。

一三〇

鳳嶺師いはく。耳に聽くのも名號、心に受けるのも名號、口にあらはるゝも名號なり。是廢立の上の知恩報德のこゝろなり。

一三一

長生院智現師心得條々。

一。吾身は惡き者と思へば、自力は離るゝなり。

一。助け給ふは彌陀一佛と思へば、雜行はすたるなり。

一。五劫思惟は我故と思へば、凡夫の思案は入らぬなり。

一。永劫の修行は吾物と思へば、勤むべき行もなきなり。

一。廣大の御恩と思はゞ、喜びは身にも餘るなり。

一。今宵も知れぬ吾身と思へば、後生は一大事なり。

一。捨て行く娑婆と思へば、深き望もなきなり。

一。頓て淨土の樂と思へば、憂きことも堪へらるゝなり。

一。極樂は吾居る處と思へば、死ぬるもさのみつらからず。

一。死に度もないと思へども、命終れば御淨土なり。

後の世を彌陀にまかせてあらうれし

あしきこゝろはさもあらばあれ。

一三二

ある同行香月院講師へ御尋ねして云く。他の者が私を御助けに腰を掛けて居ると云ひますが。

師の仰せになんとよい處へ腰をかけたなう。

一三三

圓滿寺講師消息。

何れも言申候には、阿彌陀如來に向ひ奉り、後生助け給へとたのみ奉るばかりなり。是斗りにて極樂へ參るなり。にくい、つらい、ねたましいは、凡夫の習ひにて候。心靜にならねば往生なるまじきと思ふは、ひがごとなり。たとひ、思ふまゝに心も靜になり、夜の明しやうに喜び候とても、夫は極樂參りの因にはならぬなり。たのむ我心のよしあしによつて往生するにあらず、阿彌陀如來の御力にて往生するな

り。たのみ奉るは信なり、行なり。此上に往生の爲にとて一つも勤むべき行なし。この一念のとき極樂參りの因は、みなことく〳〵く出來揃ひ申候。其上に、佛光明の中に攝めとり給ふゆゑに、極樂の約束、二度あとへもどることなきなり。此方には念佛申す事もあり、また忘れて申さぬときもあり。然れども、彌陀如來は一度たのまれては、水の火になるとても疑ひなき阿彌陀如來なるゆゑに、其恩德を思ひ出して、南無阿彌陀佛〳〵と斗り稱ふべきなり。これを御恩報謝の念佛とは申すなり。此外法義に就て、これ〳〵の品ありと云ふ人ありとも、夫は御開山樣の

御一流にては御座なく候。よく〳〵御心得あるべく候。御助け候へとたのみ奉るばかりなり。これ位のかるきことにては往生いかがと疑ふは、佛祖をあなづると申すものにて候。御領解の上には、たゞ南無阿彌陀佛〳〵と御となへ候事、ありがたきことにて候。

一三四

越前米脇のしほ女、香月院講師へ、まことの信を得たものは、國に一人郡に一人と聞くにつきましても、私は除かれますやうに存じますが、と尋ねたれば。仰せに。地獄より外に行き方のないものを助け

てやらうとある仰せの下に、誰は助からずとも私一人は御助けに預ると決定した思ひは、國に一人でもあらう。

一三五

知道師いはく。六字の御呼聲、諸佛を證に立てゝの御請合。つい知れた樣なれども、一往二往ではなかゝ心ずみもせぬ故に、平生『御文』『御和讃』の御教化大切に頂き、正しき御法義喜ぶ人にもあひ、御化導の御手離れぬ樣に心掛けられよ。

又曰く。死ぬる氣になれぬぐるみ、死なねばならぬ身ちやと云ふことを忘るなよとの、善知識の御教

化ちや。

一三六

香月院講師いはく。世間には、大方は定散でしまうのに、我等はよく〳〵宿因深厚にて、本願を信ずるやうになりたい。

又香山院講師いはく。佛法の黑人が存外定散でしてやられるぞ。

一三七

越前金津永宮寺の坊守、香月院講師へ。私は本願を信ぜさせて下された身の上を喜んで居りまするに就て、時折淺間敷い心が起つても、いよ〳〵このま

ゝながらの御助けと落付いて居りまするが、これは我得手に思ふて居るのではありますまいか、邪見にはなりますまいか。

師曰く。三なるほど心中の所は聞えたが、このまゝながらの御助けと云ふことを、今迄は此方からなりにかゝつて居たが、今はなりにかゝることではない。いよ〳〵助かられぬものぢやと知られて來たこのまゝならば、案じることはない。

一三八

一蓮院讃師いはく。なんとどう云ふて聞かせて、わからぬ、聞えぬと、實の信心得るまでは機に落ち

着かぬものがある。それはまことにありがたき事ぢや。

一三九

或人、一蓮院講師へ、聞くほど樂なことで御座る、と申し上げたれば。

仰せに。さうぢや。如來樣が助けて下さるで樂な事ぢやけれども、御報謝まで樂になつてはならぬ。御報謝は誓を立てゝきばるのぢや程に。なんでも、己れやれと、きばるのぢや。

一四〇

伊賀の三左衛門いはく。領解すまして氣儘にす

るならば、聞かぬ昔がましちやもの。

一四二

陳善院いはく。今比法義者と號する人々、高聲に念佛に節を附け、或は訛りを入れ、人の心を動かすやうに唱へ、猥りに落涙などし、人目に見えて後世者佛法者と見ゆるやうなるは、『御文』の深く表にあらはさるを誡め給へるにそむけり。瓜を作るにも心を止めることあり。蔓延と枝葉ばかり茂りては、菓實に精榮充たずして宜しからざるなり。念佛もまたかくのごとし。外現として外にあらはれし芽を止めされば、内心は浮きく〳〵なり。よく〳〵心得べきこ

となりと。

一四三

大宣明師いはく。ただのむ一念に往生は定まる。聞其名號信心歡喜。六字の名號が據となる。南無はたのむこころ、阿彌陀佛は助けたまふ由なり。その六字何處にある。向ひにあるならば疑ひになれども、この我等が邪見なる口より南無阿彌陀佛〳〵と稱ふるが證據なり。ただのむ一念の時は知られぬ。現に兜率にある彌勒は、人壽百歳の時、貝多利耶如來になる。彌勒も知らぬ。世界中に知るものは唯彌陀一物。我心には知られぬ。佛ばかりなり。口に稱

ふるは往生の定る驗しなり。

一四三

越後國三條御坊にて法事の際、福順寺圓輪師、參詣の歸途にて逢ひし青草屋のよし女に、其方は今日參詣したか。女曰く、はい參りました。師曰く、群集で聽聞も出來なかつたであろう。女曰く、やう〳〵緣の端まで上りました。師曰く、それは詮ないことであつた。女曰く、いや〳〵聽聞させてもらひました。大勢の御僧樣が不取正覺〳〵と呼んで下さるのが慥かに聞こえましてうれしうて〳〵、彌御助け下さること知らして戴きました。師歎美して曰く、予は御

經を讀誦ながら御經を聞かずに居たに、其方は御經を聞いたなあ。

一四四

香山院講師いはく。思ひ切りて、佛はよもや地獄に落し給ふまじといふ憍慢をやめて、聞其名號の教を受け、信をとらんと思ふべし。

一四五

一蓮院講師いはく。たのむのがかうちやや、信ずるのがかうちやと、あまり云ふは却つて理窟におちる。如來さまが助けて下さると喜ぶのが、いちばんありがたい。

一四六

先達て其御地水難の由承り及び候。誠に前代未聞驚入候。家藏を損じ、田地を失ひしことは如何御引受なされ候哉。かゝる時は後生どころでなしと捨つるも、これこそ後生處なりと取るも、面々の心中にあるべき事にて候。無始以來眠りの目のさめざるを、佛菩薩の善巧の方便にていぶりおこして給はる此度の浩水そと知るは、實に尊きことにて候。いつも常住此淵斷せし半日を待たずして、不定轉變の相をみせしめ給ふは、こゝぞ後生處なり。世間の氣の毒は佛法の氣の藥なり。比叡山火災の節、山王權

現これを悲み給ふべきに、火災に付き菩提心を起せしもの一人有之候とて、權現大に喜び給ひしと聞く。然れば今度も水難によりて佛法に取り付き、後生こそ一大事なりと知りつゝ、ふかく本願を信ずるもの一人なりとも出來せば、如來聖人は御滿足に可被思召候。夫をかゝる時は後生處でなしと捨てんは悲しきことなり。家を損じ、寶を失ひ、是ではならぬならぬと苦みく、命つきて地獄に墮せんは苦より苦に入るなり。後生處と取る時は、此世の事は皆宿世の約束と知るゆゑさほど苦しきことなし。三途の大河を此世でみせしめ給ふことの難有や。今にも

死ねば是にまさりし恐敷事にあふべきを、佛の御慈悲に助けられて極樂に往生せんは尊きことなりとせば、樂より樂にうつるなり。悲しきに付ても叶はぬに付ても、何事に付ても喜び多きは佛恩なり。

いよ〳〵報謝の稱名油斷あるまじく候。

光照寺

戊七月

草津御同行中

一四七

三河の長松、香月院講師に、信心決定の人に紛れて往生を仕損ずるとある御教化は、いかゞ聽聞致すことで御座りますかと尋ねたれば。師いはく、信心

の人に紛れると云ふは、我等のことであらうぞいなう。長松いはく、さて〳〵ありがたい、彼方樣がかく仰せられて下さらずば、この長松は我が計ひで紛れぬやうにして參らうといふ奴ぢやに、紛れたる此私を御助けぞと信ずると云ふことは、ありがたいことで御座ります。

一四八

能登靈城師いはく。愚痴な爺婆がこんな淺間敷い私を御助けで御座りまするとて喜んで居ると云ふは、即ち『御本書』六卷の總結、三經七祖漢和の聖教三十九部の假名聖教、正信偈、和讃、御文の至極する所は爺

嫁の安心に攝まる。こんなものがと云ふが觀經の機の眞實。御助け下さるゝと云ふが大經の法の眞實なり。間違ないと云ふが彌陀經の證誠護念なり。

一四九

明信寺いはく。五十年の間にきゝとゞけたならば大仕事ゆゑ、遂にはきゝ取らせ下されんと思ふて居る故聞えぬなり。しかし聞く氣のない者や、法を輕んずるものよりみればよし。まづ一念と云ふは佛短命の衆生をあはれみて誓ひ給へり。故にとりつめて聞くべし。

一五〇

香月院師へ長松の御尋ねに。御助け下さるに間違ないと決定いたしましたが、御禮の喜び樣が不足に存じます。

仰せに。名號へのぞみてみれば、なにの不足ありてかぢや。それを私の方で不足のない樣に喜ばれはせぬはいなう。

一五一

或人香月院講師へ申し上るには、私は聽聞いたしますほど、一念のところがきゝとう御座ります。仰せに。兎角飽いてはならぬはいなう。一生が間さどうして參らせてもらうのぢや。

一五二

一蓮院講師いはく。引立てゝも引きたゝねば佛前へ出づべし。

明信老人いはく。少しにても御慈悲ぞと知れかゝりたがきこへぞめ。

一五三

伏明師の隨筆に。

一日たつた二日たつた三日たつた

たつたく〳〵とたつたいましぬ。

たつた今おしかけてくる火の車

彌陀たのむより逃げ道はなし。

一五四

伏明師其姉政子の嫁せし時書き遺されしもの。

一。生涯いづれ心にかなふことを稀にして、樂はなちざるものなり。

一。但し道にかなふを樂みとして、いかなることもたえさらべて常に顏色をよろこばしめ給ふべきこと。

一。夫にはつゝしみうやまうて、しかもうちとけ給ふよし。必ずこゝろやす立し給ふまじきなり。

年五十に至る迄は、兎角夫の疑念かゝらざるやうつゝしみ給ふべき事。

一。嫜姑は内宮外宮の神とたふとみ、かりにも仰せにそむき給ふべからず。また下女抔の嫜姑の悪事をつぐるを、喜び聞き給ふべからざる事。

一。下はしたはおろかなる者としりて、しかも侮り給ふべからず。あはれむ心ふかく、みだりにいかり給ふべからず。

一。いかなるはづかしめをも、うけ入れていひわけし給ふべからざる事。

一。人のあしきは我行きとゞかぬ故とこゝろえ給ひて人をとがめず、たゞ我身をせめ給ふべき事。

一。後生は内心にふかくたくはへ給ふべき事。

右の條々心形を改むるかゝみなり。朝なゝくこれをかゝみ給ふべきこと肝要なり。

天保午之睦月　花押

一五五

或人香月院講師へ申し上げて曰く。今日までは同行寄合ひましても、信ずるはかう、たのむはかやう、夫では法體になるの、自力になるのと、沙汰ばかりして居りました。扨々危い命をかゝへながら、そこどころではないとたゞ誤りはてゝ、本願が信ぜられません心中で御座ります。

師曰く。盆陰の顯性坊の申された如く渡りに船

を得たる時、彼や是やと云ふ暇はない。まづ〳〵摑みついてなりとも乘るより外はない。彌陀の弘誓の御船危い命かゝへながら爭ふ所ではない。たゞ縋るより外はない。

一五六

同師の仰せに。我が機で落ちつかるゝことではない。我方で安堵することではない。善知識の御化導のたゞなことを聞きて、それで落ちつくことちや。よくきゝて安堵するを御開山は歸命とは本願招喚の勅命也とのたまう。とがくきゝて起る信心とあれば、よく〳〵念に念を入れて精出してきく

べし。

一五七

長松、水吉へ尋ねて云く。私はどうも一念の下がくらいやうに存じます。

水吉、御まへ樣や、私は明るうなつて往うと云ふのちやはいなう。闇いなりで助けて下される御慈悲があるはいなう。

一五八

或人龜洲師へ。私はとかくに名聞の離れぬ心中で御座ります。

師曰く。名聞とは名を知りて體を知らぬこと。

喩へば金のないものが金持の顔ずること。肝心の信心なしに居て得た顔して居るが名聞なり。併し世間の病人が藥を呑むときは外へは出ずに内に居る。病氣が全快すると外へ出かける。後生の大事はそれとはぶりかはり、疑ひ案じごとの病ひのある間は内に居るのではない、外へ出で聞かねばならぬ。聞くのが藥ゆゑ、病氣も治するなり。

一五九

香月院講師御病中の仰せに。世間を見るに尼女房たちは皆大いに喜ばれる樣子ちやが、心底より喜ぶのか知らぬ。

御伽やくせん女の御尋に。心底よりとはいかがのことで御座りますか。仰せに。心底よりとは心のそこからと云ことちや。

一六〇

明信老人はく。本願を讃めて喜んで居る人は謗るからみればよけれども、信ずるからみれば天地の違ひなり。信ずる人は正因となりて往生す。讃めて喜ぶ人は他人に敬はれて地獄に墮ちる。喩へば表に火の手がみゆれば鍾太鼓の騒ぎあり。藏の中の蒸燒は人の知らぬ難儀なり。誹つたり疑ふたりするものは、人がそのまゝおかぬゆゑ、心を翻す時

もあるべし。喜んで讃めて、人目にはよく信ずるやうに見えても、内心自力に止らば人には一生羨まれながら終には墮つる倉の中の蒸燒なり。よく〳〵心得べきことなり。

一六一

樂心院大量師いはく。婆婆腹では信は得られぬ。婆婆腹とは此世の好きな事のみ求め、悲しき事、淋しきこと、つらき事の起るを歎く心が婆婆腹なり。後生さえ助からばと思ふが後世ばらなり。其心となれば つらいことと起れば、それを喜ぶ心あり。其故は若此世が十分ならば長き後世を忘れて失はんに、か

くつらき世界と知らせ下されば こそ淨土の無爲の樂を願ふ心起りたれと、心つらきことに逢ふほど、恥をかくほど人に貶めらるゝほど、いよ〳〵嬉しくなりたるが後世腹なり。婆婆の不仕合を歎き、仕合を喜ぶ心にては、日々助けるその大悲の仰せを聞きづめにしても信喜の心は起らず。喩へば繫舟を漕ぐが如し。徒の求法なり省覺して聞くべし。

一六二

清九郎いはく。私に金のないのも御慈悲ぢや。如來樣が金もたしてよければ持たして下される。未來永劫の難儀を御助け下さるゝ如來樣ゆゑ、この

世の難儀ぐらゐはどうでもなされる。私には金持たせるとわるい譯があると見えます。何事も如來樣の御計ひなり。

一六三

伏明師の隨筆に曰く。京大融寺圓智坊は、初め浪華の人にして紀の國屋亦右衛門といふ、本家何某につかへて正直なりし人なり。主人それに百兩の資本を與ふ。百兩を三千兩に、三千兩を萬兩に、萬兩を十萬兩にして、それを元の主人にゆづり與へて大融寺に出家して辭世に左の歌をよまれけり。

おちてゆく奈落のそこをのぞきみん

いかほど慾のふかき穴ぞと。

一六四

江州の武左衛門いはく。既に本願他力の趣聽聞仕候上は自身の聽聞に引あてゝきく心持に候、如何。

伏明老師いはく。それは高慢にまぎれて惡し。たゞ我身はなにも知らぬものなりと思ひて御聞がせありがたしと心得て聞くべし。今其許の申さるゝは我已に心得顏の分際なり。道宗は「いつも聽聞申すがはじめたるやうにありがたい」と申されたり。我よく是迄に聽聞して居るの慢心を差置き、たゞ御

聞せありがたやと云ふ心になりて聽聞すべし。蓮如上人の御助けありつることのうれしさよと喜べば、自力にまぎれてわろし。御助けあらうずることのありがたさよと喜べ」と仰せらるゝが如し。一念の時御助けは明なれども喜ぶものゝ心得は御助けあらうずることの嬉しさよと喜ぶなり。今迄に安心の趣聽聞したれども、その上に聞くは我はなにも知らぬ身の上、たゞ御聞せ下さるゝありがたさと云ふ心得にて聽聞すべし。

一六五

悅成師いはく。たゞ名聞にも參詣すべし。耳

に止まなり。左の耳より右の耳へぬけても法味は自然に止るべきなり。されば利養にも聽聞すべきとなり。

一六六

又曰く。安心は信後喜びの種なり。

一六七

江州宮川の信女いはく。私はこうして居るのが地獄の釜の上に吉野紙引つ張つて坐つて居るのちや。これなりで南無阿彌陀佛といたゞくばかりちや。

又曰く。私はいつもあなたにうしろむけては口說いて居るのに、あなたはいつも私の前へまはりて

は、そのまゝ助けるぞ〳〵と呼びづめにして下さるゝ。

一六七

惠勇師香月院講師へ御尋ねして曰く。私は眞實に領解して居るか居ぬかと案じることは信の上にもあることで御座りますか。

師曰く。それがなうてならうかや。この心があればこそ、一生相續出來るのぢや。

一六八

或人同師へ『御文』の中に『八萬の法藏を知るゝと云ふとも後世をしらざる人を愚者とす』と仰せられたるはいかゞで御座りますか。と尋ね上げたれば、

仰せに。あれは佛法ともしらぬものゝことぢや。

左樣なら御寺參りも致さぬ者のことで御座りまするか。

仰せに。さうでない。あれは我々のことぢや。

一六九

玄風師曰はく。大出要鍋の足三本あり。

一。大事の天上。

一。大力の天上。

一。大劣の天上。

一。後生といふは三界を離れて淨土に生るゝことなれば以ての外の大事なり。

一。彌陀の名號はよく其後生を助くるの妙法なれば以ての外の大力なり。

一。後生を願ふ衆生は元より造惡不善にして以ての外役にたゝぬものなり。

後生を大事と知り、彌陀佛を大力なりとし、我身を大の役にたゝぬとしれば、鍋の三足長短なきがごとし。

こゝで安心決定の尻が据るなり。

一七〇

江州の九平は、知道師に從ひて所々へ參詣なし、なかゝの厚信者なりしが、或年の暮、知道師は彦根の法用を濟して歸國さるゝことなれり。九平降りしきる雪も厭はず、御一言の御示を蒙りたさに遂に美濃の牧田まで隨從し、もうされにて御暇申し上げますと、申し上げたれば、師の仰せに。

あてのちごうたことを聞くと思へ。

一七一

大量師の歌に。

あひがたき法とはしれどこの法を
極難信とするはまれなり。

おもふても見る人もなし御佛の御舌の證はなにゆゑぞとも。

一七二

長生院智現師いはく。

一。法義をすきこのみて、家職を投げやりに致し、身の上を知らざるものあり。

一。家職が大事なりとて、唯今生を重として。佛法を投げやりにする者あり。

一。法義はよく定まれども王法仁義を欲くものあり。

一。王法仁義はよく守れども法義に疎きものあ

り。

一。佛法は能く聽聞すれども、報謝の勤をなげやりにするものあり。

一。參詣も能くいたし、念佛も暇なく申し、報謝の營はあるやうなれども、安心の筋不分にて、或は異安心に陷るものもあり。

一。安心筋報謝は缺目なく居ながら、御本山や師匠寺へ隨分相應の懇志も運ばざる人あり。

一。懇志取持はよくいたせども、御法義筋を投げやりにするものあり。

一。法義を沙汰し、懇志取持は致せども、名聞利養

の心ゆゑ、他の同行の失を申し立て、法義取持の人を嫉み、又法義に事寄せ、他の金錢を取りたりするものあり。

一。往生大事の心掛け深くして、家職の働き油斷なく、身分に過ぎたる奢を爲さず、參詣供敬怠らず、王法仁義の道を嘈み、家内和合し、近處隣の人にも嫉まれず、地頭領主たる所の役人等の云ひ付もかしこまり、他宗の人にも謗られず、内外睦しく法義相續して喜ぶ人これ尊し。

一七三

私は聞いた時は貰へたやうでも、また失ひますに

困りますが、如何したらばよろしきか。

明信老人いはく。喩へば京へ參りたきも、我身が愚にて貧きゆゑ、如何せんと困り居る時、慈悲深き金持ちの主人氣毒に思ひて、京へ參りたくば我がつれて行かんと云はれたるときは、如何なるものもやれ嬉しやと、何の分別もなく左樣なれば御連れ下されと賴む心は志願滿足の思ひなり。たゞ連れて行うとは、我が愚なるゆゑ、貧なるゆゑ、平生願ひ居るゆゑなり。受けられたが、受けられぬか。一旦戴いたがまた失ふて困ると云ふやうなことのあるべき筈なし。さて出立の上は他人は目に付かぬ。只その人

の相ばかりに氣を付けるなり。これ我に路銀なく我道を知らざればなり。一度仰せに順ひ奉つりし上は、佛とは離れぬ身となるなり。佛の我等に離れ給はぬは、過去久遠よりこのかたなり。我等が佛に離れられぬ身となりしは、今が初めなり。之を佛智不思議につけしめてとのたまふ。これ攝取せられたる印なり。

一七四

水井吉郎衛門、或時人に尋ねて。臨終になりて聞いたことは忘れ、念佛は申されず、御慈悲は喜ばれず、ありがたうもなし、早く極樂へ參りたいと云ふ心も

なし。空々寂々で命が終る。そのとき信心を得たしるしは何であらうと。時に誰も答ふることなく、どうか聞せて下されと云へば、水吉いはく。助けられるばかりぢや、と。其後水吉惠勇師に逢ひて、このことを申し出でたれば、師曰く。助けらるゝばかりかと云へばさうぢやけれど、もちつと足らぬ。平生御教化下さるのもそれを御教化下さるゝのぢや。それを聞くのぢや。それを思ふて念佛申すのぢや。

一七五

江州高野の信次郎ながらく一蓮院講師に隨ひて聽聞せしが、餘りに胸が美しすぎると云ふ人ありし

かば、香山院講師に御尋ねしたるに、同師曰く。言の如きの領解ならばよしと。されど何となく氣がゝりなれば。再び蓮井雲溪師に御尋ねしたるに。

一つゝつ塵みえかゝる夜明かな。

この上が大事なりと仰せられしと。

一七六

明信寺いはく。心を一つにして云ふは彼方の御心一つで助かるのぢや。こちらの心はいくつあつてもかまうことはない。

又いはく。まことに逢ひがたき法に今あひ奉り、聞かせていたゞくことのありがたや尊とやと、氣の

付いたが初めて阿彌陀樣にあふたのぢや。

一七七

或女水井吉郎右衛門に逢ひて、御前さまは處々方々へ聽聞してあるさなさるが、私はいつも内に居て婆婆の仕事ばかりにかゝりて居る。行狀のところをみれば大違ひぢやが、これで一つ淨土へ參らせて下さるかい。

水井吉郎右衛門いはく、せはしく暮して居る淺間敷い者を參らせて下さるゝのぢや。その御慈悲をおれも聞いて歩くのぢや。

一七八

一蓮院講師いはく。夫人間ははかなきものなれば今には無常の風來りぬれば死なねばならぬゆゑに、はやく未來の用心をなすべし。我等は罪深きものなれば、我力にてとても地獄は免かれがたけれども、阿彌陀如來の仰せには、我を一心にたのめ、願力によりて必ず地獄へは墮さぬ、間違ひなくわが淨土へ迎へんとの御慈悲なれば、その誓を實と思ひて、一心一向に阿彌陀如來に縋る思ひのおこるときは、はや往生は佛の方より定め給ふゆゑに、つゆちりばかりも我心をたのみとはせず、南無阿彌陀佛一つで御助け下さるぞと信じたてまつりて、たゞ何のなかよりも

稱名念佛申せば、早一念のとき往生の定まることを喜ぶばかりなり。

一七九

同師の歌に。

人の身はさもあらばあれとおもはねど
こゝろ一つをすゝめましかば。

武藏鐙をゝろにかけて法の師は
駒ゆくひまの間もつとめなん。

一八〇

別等覺老師いはく。みなはとかく眞宗の體が壞れたある。あの相撲を見るに倒れた方へ行司が扇を

掲げると、見物の人々は行司を非難する。これ素人眼には勝つた樣に見ゆるからなり。されど相撲の體が崩れてあるゆゑ、勝つた樣に見えても實は敗なり。眞の勝敗は行司でなければ分らぬなり。眞宗の念佛行者が多く聖道門のきだんになり、相は殊勝にみゆれども、何となく氣が高く見識を立てゝをるから眞宗の體が崩れてある。

一八一

一蓮院講師いはく。一念慢の念を起せば、世界中の惡魔を一時に招待するなり。

一八二

江州了眞明信寺へ參り、私は淨土へ參られるともまゐられぬとも心配なく、又淨土をさのみ樂む思ひもなし。たゞこの淺間敗い胸のうちから絶えず稱名のとなへらるゝがうれしう御座ります。仰せに。彌陀をたのむと云ふは、さういふことではない。たのみになりたのしみになることぢや。喩へば貧しい女が善光寺へは參りたけれど、金がないとて悶いて居るとき、悲慈な人より金をもらひ、嬉しがつて居るが如きは、法は他力なれども機は自力なり。然るに、其方は老人のことゆゑ、金もいたすことは出來ぬ。おれが連れて參らうの一言を信じ左

様なら連れて行つて下されと、身も心もうちもたれたが、彌陀をたのんだのなり。もはや知らぬ旅へ踏み出し錢はなし、行く先は知られず、其人見失ふたち行かれぬ如く阿彌陀様に心の離れられぬが樂になつたが、ねてもさめても憶念の信つねにして忘れざるを決定信ぢや、と仰せらるゝ。此方に仕度はいらぬ。連れられて參る淨土なれば何の造作もない。たゞ彼方が戀しく懷かしく、杖力になりて忘れられぬが仰せに從はれたのぢや。これが善知識の言の下に歸命したのぢや。

一八三

高野信次郎いはく。一蓮院講師ある時人々に向ひ、面々の領解を言ずくなに申し陳よと仰せありしかば、みな口々に申し上げたりしが、多くは覺えた分齊や御教化の口眞似で師意にかなはず、最後に一人進み出で、仰せが私の御領解といたゞきます、と申し上げたれば、師微笑し給ひ、ことの外御滿悅なりしと。

一八四

香月院講師への御尋ねに。私は淺間敗い心がみゆれば信は得られぬかと存じます。

師の仰に。信を得るほど惡さがしれるばかりぢや。罪はいかほどふかくとも、と仰せらる、其中に何

も角もこもりておるはいなう。

又申し上げて曰く。聽聞の手前ではもし違ひはないかと案じます。

仰せに。罪はいかほど深くとも、我を一心にたのまん衆生をば、必ず助くると仰せらるゝ。それでもし違ひはないかと思ふは、仰せに背くと云ふもの

ちや。どつさりと大山に腰うちかけた氣になつて信じたがよい。

一八五

伊勢さと女いはく。小屋の冬瓜は是非落ちねばならぬ筈のものがおちずにあるは、十文字に紮げた

繩の力ぢや。必定して墮ちねばならぬ私なれど、攝取不捨と十文字に御慈悲の大繩に紮げられて墮ちとうても墮してはくださらぬ。うれしいことで御座ります。

一八六

出羽の彌左衛門は、聞いても〳〵聞こえず、京都へのぼりて華藏庵惠然講師に謁し、懇なる教化を受け一旦領解したるも、歸國の後疑惑起りたれば、再び上り三度下り、二百里餘りの處、三ケ年間に八度まで往返しけり。最後に惠然師は、越後の歡喜庵秀啓師を尋ねしめられたり。彌左衛門、秀啓師より懇々の教

示を受け、それより疑の闇晴れて堅固の信者となれり。

一八七

香樹院講師、新井の妙慰に對し、おれの力で信が得させられることなら、胸がきわりていても、おしこめてやりたいけれど、仕方はないと、涙ながらに仰せありたり。

一八八

大和の妙宣は、若年より尼となり、香樹院講師に常隨して法を聞きし人なり。或時師の仰せに。妙宣御前は世をすて尼となり居るが、御開山の思召は

は叶ぶまじきぞや。又或人、妙宣尼へ心中のほどを聞かし申されたさと云ひければ、尼の曰く。私の心中申さば巡査が縛りに來ますと。また領解を尋ねたれば曰く。私はなにも信じて居らぬやうなものて御座りますと。

一八九

香樹院講師いはく。他力と云ふは信心ばかりのやうに思へども、左にあらず。このたびの後生一は仕遂げたいとおもふ心とても、凡夫の心よりは聊も起らず。それに就いて法にあひたいと思ふとも自力修行は叶はず、又善知識なくてはきくことならず、

それに不相應の凡夫が佛になる望の聊でも起るは廣大無邊の善巧方便なり。少しなりとも聞く氣になりたは、みな佛智の御念力なり。

一九〇

同師いはく。虛僞で事の成ずると云ふことはない。まことに求めさへすれば得らるゝ。郭巨が釜を得たもまことじや。眞實に佛法にその志は淺くして仰せらるがそこちやや。本氣になり、まこと後生が大事になり、その心になり、聞くに骨折るが、取りもなほさず宿善の萌ちやや程に、我等が虛假不實の心が宿善到來して、ほんに後生が大事になりて、ほん

まの心になると、人並も名聞もはなれて、何處までもとおすが實と云ふもの。宿善の開否はこゝでしれる。業障と宿善と首引きで、業が勝つとそのまことが通らずに仕舞ふ。宿善よく〳〵手厚ければ、おのづから未だほんまに行屆かぬところに氣が付いて、進みゆくほどに、こゝが骨折りどころちや。

（香山院講師御言を加へて曰く。鳥さしの狂言御覽のごと、また煩惱おこすはまことに起すこと。）

一九一

また曰く。たのたび間違ひのない往生の遂げらるゝ傳授がある。何も六ケ敷いことではない。ほ

んまに往生仕度の氣があるかないか。その望がほんまか嘘か。次ぎ前のまことゝ云ふが爰ぢや。その實にも器次第で強き弱きはありさうなことぢやが、我心一杯欺かぬところをまことゝ云ふ。すれば出來ることを、できませぬ叶ひませぬと云ふは、尪弱を欺きだますと云ふもの。心一杯の實意をまことゝ云ふ。心の甲斐性のない弱者は、よはいなりで形作る。然れば各ほんにこの實があるか。此處や彼處で聞き回りて、閻魔王に申し分けに念佛申さうの、地獄が恐ろしさに聽聞すると云ふ位の心中ではまことではない。

一九二

又曰く。極難信ぢやで骨折れ。『大經』に「つとめて自ら之を求めよ」と仰せらるゝ。その骨折り所が知られぬ。骨の折れるところまで聽聞するが大抵ではない。折る骨がない。また振向き違ひて骨折つて居れば無駄事ぢや。稱名憶念すれども無明猶在つてと云ふて、如來の御慈悲の忝さも思へば涙もこぼれ、念佛も稱へらるとも、なにがどうかは心の底がいつも〳〵同じやうにすつきりとせぬ。爰に於いて落付いてをるものは世間になに程もある。この心に手を附けると、何處迄も明るい心になられぬゆ

るこの心に當惑するのではない。かゝるものを立ちかへるのぢやなどは、ほい加減に氣ずまして落付いて居るのぢやない。それらはみな邪見と云ふものぢや。

一九三

同師いはく。色もなければ形もなし。選擇本願の無量壽佛、活き佛はこれぢや。知りて居るか。口に出入りの南無阿彌陀佛。夫婦も娑婆限り、親子も娑婆一世、五尺の體も娑婆の置き土產。盡未來際紫金蓮臺に乘り、六十萬億那由他恒河沙由旬の佛になる品物は口に出入りの南無阿彌陀佛。

この南無

阿彌陀佛に助られての往生ぢやと頂いて下向せよ。

一九四

香月院講師いはく。娑婆逗留は御淨土の舞臺へ出でゝ生れもつかぬ果報の手柄をする樂屋なり。それ故に、この世は淨土參りの稽古場と心得て、幾度も幾度も聞きなほしては聞ぐべし。香樹院講師いはく。聽聞は娑婆逗留の手提灯と。

一九五

宏遠老師いはく。予八十に垂として七十餘年の非を知る。某禪師は大悟十八小悟數を知らずと云ひしが、予數十年來これこそ信心發得と思ひしに、い

つも自力の迷情にて思ひ堅めたる一念を信決定と認めしゆゑ、隨つて成ずれば隨つて壞る。かくのごとくなる七八回なるのみならず。只これ疑惑の暫時頭を出さぶるのみ。幸に長壽を保ち、纔に佛願の生起本末を聞きて疑心あることなきに至る。然らずんは、寶の山に入りながら空手にして歸りなん。危哉。

香樹院講師、八十三歳の比、桑名別院にて仰せに、

おれも大方こぎつけたり、と。

一九六

明信老師は示談の時、何時も今旅立の席に臨みたるが如く、さあどうぢや、今の喚聲が何と聞えるぞと云ふ勢なりき。

或人同師へ今後はどう日暮致しませう。

師曰く。汝はこれから日暮しするつもりか。そんな心得て居るから聞えぬのぢや。

一九七

悅成師いはく。臨終の夕に鬼が火車をもちて來らば乘るや乘らざるや。眞實信心の行者は必ず乘るべし。若乘らば鬼は轉ずべきなり。それは何故なれば、此人の心はもはやなければなり。

「超世の悲願きゝしより、われらは生死の凡夫かは、

有漏の穢身はかはらねど、こゝろは淨土にすみあそぶ」とのたまへり。

一九八

人々の辭世の中に。

㊐　深勵

思はずも迷ひのはてはつきにけり
證のきしは今日や明日やと。

秀存

○

今はとてなはをかいはん南無阿彌陀
佛はは　ちすひらかせてまつ。

鳳嶺

かねたよりこゝろにかけし彼國の
寶の植樹眼のまへに見ゆ。

義導

㊐

おそくともあとよりまゐれもろ人よ
彌陀の淨土はわが本家なり。

悅成

㊐

しにとうはなけれどけふのうれしさは
なにゝたとへんあゝ南無阿彌陀。

德成

○

德成が辭世いかにと人問はゞ
南無阿彌陀佛ととなへよといへ。

○　教山

いふもうそおもうもうそでまるめたる
うそつき坊が彌陀のまことで。

○　制心

六十九年一夢中。夢中悲喜忽然空。
方知此界因緣盡。速到西王七寶宮。

正遵

病重今日去此世。七十餘年迷霧晴。
垂死心中無一物。唯聞岸上呼喚聲。

玄風

廓然大悟　事在平生。

身命玆盡　從明入明。

一九九

香樹院講師の手記錄に曰く。

一。六字の謂をきくとは、御助けの法のまゝを聞くこと。其御助けをきくまゝをたのむとは云ふ。きくまゝを聞くに非ず。まゝの沙汰までもいらぬことをきくなり。おきかせの聽聞の法によくきく能歸の機までも成就してあるゆゑに、聞くまゝを信心とは云ふなり。

二。後生助けたまへとたのむ能歸の體は聞いて覺えたでなし。聞いた功でなし。助け給へとたの

む能歸の體は攝取なり。御助けの法のまゝが、私の御了解とは此事。實言の外に信心なし。

三。生れられぬまゝ、生れさうの仰せが聞こへたれば、ならふのつもりはいらぬこと、助けたまへとは、たすけられることをきくことなり。聞くとはきゝ心を離れて、御聞かせの法味を甘んずるばかりなり。

四。攝取してすてぬとある大悲のまことがきこえてみれば、助かりたいがいらず。おちまいがいらず。ならふがいらず。仕上げることがいらず。只實言のはたらきを仰ぐばかりなり。

五。如來永却の修業を全體施名として名に體の德を全うして施す法なれば、百千音聲の法なり。音聲の法なれば、六字の謂を聞くとは助け上手をきゝひらくなり。六字の謂とは助け上手をきくのなり。

六。併しきくと雖も、聲と言は心の使ゆるに、聲にはなれ言につかず、聽聞にわかれ彌陀のこゝろを知る一つ。知る一つを知るにあらず、知れた心に目をかけず、信心の功をみず、所信の法功を知る一つ。

二〇〇

知道師の臨終に際し、御弟子の一人御尋ねして曰く。恐れながら、未來の御覺悟は如何。

師曰く。おれに何の覺悟はない。何故なれば今度は親樣につれていたゞくのぢやから、おれに覺悟はない。

二〇一

江州鎌掛村おせき、臨末に曰く。この私は一生涯御敎化の裏道ばかり歩いていましたが、今度は仰せばかりで往生さしていたゞきます。

二〇二

ある厚信の小女の臨終に際し、枕頭の人、うれしいかと尋ねたるに。いゝえ、喜ぶどころか苦しいばかりで行先はまつくらがりと、應へたれば。それでは

危なからうといへば。否々と云ふ。それは何爲かと問ひしに。それでも親樣がきつとつれて行つてくださるもの。

二〇三

大通院義順師いはく。たのめたすけうとは、今地獄へ墮ちゆく後生を、我をたのみに思ひ力に思ふて、後生の世話をそつくり己にふりむけて、やかせくれよとのおこゝろなり。實に彌陀の先手に引き起されてあなたをたのむなり。

二〇四

實言院いはく。仰せを聞いたばかりではものた

らず、聞いてたのむ心を起さねばならぬと心得るゆゑ、他力回向の法門が崩れて仕舞うなり。よく〳〵心得べきことなり。

二〇五

如説院いはく。大願強力を目當に往生を決定するが、一念發起なり。

二〇六

後生が心にかゝり廣く厚信者を尋ねて法を求めんため北國より關東に向ひたる同行、相模まで來りたるに一信者に逢ひたれば、心中の趣申し出でたるに信者のいはく。汝は領解の石垣積にあらずや。

折角精出して石垣を積み城を構へ、安心して寢て居ても、一夜太海嘯が起らば石垣も城も一時に流失せん。その時に殘るものは天上の月一輪なり。領解の石垣安心の城は、如何に堅固なりとも、臨終の大海嘯には忽ちに碎かるなり。其時になりても少しも變らず動かぬは、御慈悲の月一輪のみ。たゞ仰せ一つが眞實なりと。

二〇七

大和文七いはく。昔清九郎は芋を商へり。路傍の小童等これを見て、清九郎を泣かしやらんと相談し、後より清九郎の脊を叩き、これ爺後生忘れては居

らぬかといふ。これを聞く清九郎は、いつも芋の荷を捨て置き泣き倒れしと。

二〇八

知道師へ或人領解を述べたれば、師曰く。なんとよく覺えたものぢやなう。一體それは敎へる坊主がわるいのぢや。

二〇九

等覺老師いはく。かゝるものを御助けと、法を機に引き付けてくると、一種深信になり、機法合體になる。墮ちぬ機になりにかゝるぢやない。もと彌陀の本願は墮ちぬものを助けうではない、墮つるもの

を助けうの本願なり。烏は黑いで黑い、鷺は白いで白い。墮ちるで墮ちる、助かるで助かる。機と法とのありのまゝが顯るゝなり。大抵は御助けを機につけておくから機法合體なり、又一種深信なり。

又曰く。墮ちるまゝが御助、御助けけのまゝが墮ちる機と。

二一〇

明信師は法類の偏執者より種々の誤解を受けて、度々御調べに逢はれたり。師はその度毎に、御直しに預りたい、誤を改めたう御座りますと喜ばれしと云ふ。

二一一

香樹院講師の仰せに。我身の誤はみな彌陀の知りぬき給ふことを知らずして、悪いこと隱して淨土往生する機ゆゑ、實の喜びに縋られぬなり。それ故善導は無有出離之緣とのたまふ。自分から助かる道理拵へる樣に思ふたゆゑ、晴れなんだ疑なり。

又曰く。今迄はどうたのんだら助からう、如何したら參られうぞと、己が方に淨土參りする心拵らへて生るゝことゝ思ふたに、心止めて聽聞してみれば、殘らず彼方の方に御成就なされた六字の名號、何のやうもなくなにの造作もなく、淨土參りすることか

と思へば、人頼むやうなたのみではない。

二一二

播州の老婆後生が苦になり、居ても居られず、同心の友を得て二人して御舊跡を回り、廣く知識を求めんと企て、六七十日も訪ね走き綿の樣になつて歸り、さて曰く。長い間詣ね歩いたがなんでもなかつた體はぐだ〳〵に疲勞てくる。持て居た財布は空になる。もうこの私はどうして見ても助からぬ生れながらの盲人であつたと、今度は本復させてもらいました。

安心小話 終

明治四十四年十一月十五日印刷
明治四十四年十二月十八日發行

安心小話與附
金五十錢

譯述者　滋賀縣蒲生郡櫻川村綺田四十四番地　秃　義　峯

發行者　東京市巢鴨町三丁目三十五番地　原　子　廣　宜

印刷者　東京市本所區番場町四番地　守　岡　功

印刷所　東京市本所區番場町四番地
出版印刷株式會社本所分工場

發行所　東京巢鴨町三ノ三五
振替東京三一二三番　無我山房

不許複製

無我山房發行書目

佐々木月樵 **親鸞聖人傳** 金貳圓五拾錢 郵税拾貳錢

佐々木月樵 **親鸞傳叢書** 金貳圓 郵税拾貳錢

佐々木月樵 **秀存語錄** 金六拾錢 郵税六錢

佐々木月樵 **實驗の宗教** 金壹圓 郵税八錢

佐々木月樵 **救濟觀** 金廿五錢 郵税四錢

佐々木月樵 **安心坐談** 金六錢 郵税貳錢

柏原禿 **香樹院語錄** 金七拾錢 郵税八錢

山邊赤沼 **聖典物語** 金八拾錢 郵税八錢

曉烏敏 清澤先生 **の信仰** 金八拾錢 郵税八錢

曉烏敏 **惠空語錄** 金八拾錢 郵税八錢

曉烏敏 **求道錄** 金參拾錢 郵税四錢

曉烏敏 **吾人の宗教** 金參拾錢 郵税四錢

安藤州一 清澤先生 **信仰坐談** 金廿五錢 郵税四錢

安藤州一 **染香錄** 金七拾錢 郵税八錢

安藤州一 **生活問題** 金八錢 郵税貳錢

清澤滿之 **精神主義** 金參拾錢 郵税四錢

無我山房發行書目

清澤滿之 **精神講話** 金參拾錢 郵税四錢

清澤滿之 **佛教講話** 金參拾錢 郵税四錢

清澤滿之 **修養時感** 金廿五錢 郵税四錢

清澤滿之 **我信念** 金五錢 郵税貳錢

南條博士 **歎異鈔講話** 金八拾錢 郵税八錢

南條博士和譯 **無量壽經** 金壹圓五拾錢 郵税拾貳錢

南條博士同朋 **心得十ヶ條講話** 金拾貳錢 郵税四錢

近角常觀 親鸞聖人 **の信仰** 金七拾錢 郵税八錢

多田鼎 **正信偈講話** 金壹圓五拾錢 税税拾貳錢

多田鼎 **恩寵の宗教** 金廿參錢 郵税四錢

多田鼎 **修道講話** 金廿參錢 郵税四錢

多田鼎 **大聖釋尊** 金八錢 郵税貳錢

多田鼎 **歎異鈔講話** 金四拾五錢 郵税六錢

多田鼎 佛傳 **涅槃篇** 金八拾錢 郵税八錢

齋藤唯信 **信仰と修養** 金廿五錢 郵税四錢

本多辰次郎 近世 **高僧逸傳** 金貳拾錢 郵税貳錢

無我山房發行書目

和田龍造 **宗教問題** 金六拾錢 郵税六錢

和田龍造 **他力宗教論** 金參拾五錢 郵税四錢

和田龍造 **偉人の言行** 金六拾五錢 郵税六錢

和田龍造 **香月院語錄** 金壹圓 郵税拾貳錢

浩々洞編 **佛教辭典** 金貳圓 郵税十二錢

浩々洞編 **信仰五部書** 金四拾錢 郵税四錢

浩々洞編 **歎異鈔** 金四錢 郵税二錢

浩々洞編 **安心決定鈔** 金四錢 郵税貳錢

浩々洞編 **末燈鈔** 金四錢 郵税貳錢

浩々洞編 **執持鈔** 金貳錢 郵税貳錢

浩々洞編 **口傳鈔** 金五錢 税貳錢

親鸞聖人 **御傳鈔** 金壹錢五厘 郵税貳錢

雜誌 **精神界** 一部金拾五錢 一ヶ年壹圓七拾錢

雜誌 **家庭講話** 一部金六錢 一年七拾錢

浩々洞編 **逝如上人御一代記聞書** 金九錢 郵税二錢

施本雜誌 **同朋** 一部貳錢一年廿四錢部數に依り割引あり

無我山房發行書目

曉烏敏 **歎異鈔講話** 金一圓七十錢 郵税十二錢

曉烏敏 **佛教入門** 金二十錢 郵税四錢

浩々洞 **御傳鈔講話** 金一圓七十錢 郵税十二錢

金子大榮 **讃仰錄** 金二十錢 郵税四錢

佐々木月樵 **親鸞傳繪記** 金八十錢 郵税八錢

齋藤唯信 **佛教倫理** 金二十錢 郵税四錢

赤沼智善 **釋尊の生涯及其教理** 金一圓七十錢 郵税十二錢

來馬白隱禪師參禪要訣 **遠羅天釜** 金十五錢 郵税四錢

禿義峯 **安心小話** 金六拾錢 郵税八錢

淨土三部經講義 近刊

教行信證講義 近刊

淨土 **文類聚鈔講義** 近刊

三帖和讃講義 近刊

八宗綱要講義 近刊

天台四教儀講義 近刊

大乘起信論講義 近刊

無我山房發行書目

眞宗聖典
増補第十三版
梅上尊融師序
大谷瑩亮師序
浩々洞編
並製七十錢
特製一円
極上一円二十錢
郵税各八錢

禪宗聖典
好評五版
釋宗演師序
日置默仙師序
來馬琢道師編
並製八十錢
特製一円十錢
極上一円三十錢
郵税各八錢

淨土宗聖典
好評三版
山下現有師序
堀尾貫務師序
望月信道師編
並製一円十錢
特製一円四十錢
極上一円六十錢
郵税各十二錢

日蓮宗聖典
近刊
柴田一能師
山田一英師共編
並製八十錢
特製一円十錢
極上一円三十錢
郵税各八錢

碧巖集講義 近刊

臨濟錄講義 近刊

正法眼藏講義 近刊

學道用心集講義 近刊

坐禪用講心記義 近刊

普勸坐禪儀講義 近刊

選擇集講義 近刊

多田鼎 親鸞聖人 近刊

268
609

017340-000-3

特12-946

安心 小話

禿義峰/著

M44. 12

ABF-0027